

【小説部門・奨励賞】

座敷童と祭りの話

私立北星学園女子高等学校 第3学年 片木春香

そこかしこに漂う甘い匂い。

子供たちのはしゃぎ声。

遠くから聞こえてくる神楽の音色。

今日は、祭りの日。

私は学校が終わった後、友達と一緒に訪れていた。

会場となっているこの神社はあまり大きくなく、祭りの規模も小さいけれど、近所の人々が入れ替わり立ち替わり出入りしている。

そんな中、お手洗いにいった友達を待つため、人が少ない杜に、私は一人、ぽつねんといた。

木に寄りかかって茜色の空を見上げ、雲が流れていくのをぼんやりと眺める。

だからなのか、私は最初、その言葉が自分に向けられていると気付かなかった。

「良い夜だね」

「……………」

視線を下ろすと、隣の木に同じように寄りかかっている子がいた。

暗闇に浮かぶ白い浴衣に白い肌。それと対照的な、真っ直ぐで艶のある黒髪。まだ幼さが残る顔立ちなのに、その眼差しはとても大人びている。

ついでに、とても目鼻立ちの整った顔で性別が分かりにくいけれど、浴衣の装いからして少年だろう。十二、三歳くらいだろうか。

少年は応えない私に構わず言葉を続ける。

「それに、良い祭りだ。皆の気が晴れやかだからね」

「……はあ……………」

「ねえ、君は知っているかい。この神社に祀られている神のことは」

「ん……そういえば知らない。でも、有名な神様じゃなかった気がする。土地神、あれ、産土神だっけ？」

「……なら、話してあげようか。丁度、誰かに聞いてほしかったんだ」

そう言って空を見上げた少年の瞳は、どこか遠くを見ているようで、私は何かをも言えなかった。

聞く姿勢になり黙った私に、少年は言葉を紡ぎ始めた――

二

――これは、今からずっとずっと昔の話。

とある資産家のお屋敷に、幼い娘がやって来た。

娘は屋敷の主たちの親族で、養子として貰われて来たのだ。

初めは、主である夫婦も娘を歓迎しているように見えた。娘も、実家とは違う屋敷の装いに胸を躍らせ、終始目を輝かせていた。

それが変わり始めたのは、娘が来てから数日が経った頃だった。

夫婦は娘に雑務を言いつけるようになった。屋敷の掃除や、夫婦の雑用が主だった。屋敷には使用人も女中も居たのに、だ。

それだけならば、社会勉強と言っても通用しただろう。しかし夫婦は、娘がやること一つ一つに難癖を付け、折檻したのである。

窓を拭けば汚れが取れていない、叩きをかければ埃が残っている、雑用で何かしくじれば「馬鹿者！」と怒鳴られる。

それだけで済めば良い方で、虫の居所が悪い日は、棒で打たれたり、座敷牢に閉じ込められたり、食事を抜かれることも多々あった。

それでも娘は泣き言の一つも言わず物事をこなした。同じ年頃の子供たちと遊べなくても、関わりたくないからと女中たちに避けられても、身体が痛くて痛くて仕方がない時も、一生懸命小さな身体を動かした。

けれど、限界はやって来るもの。

その日も娘は些細な事で怒鳴られ、座敷牢に放り込まれた。

食事は朝に摂ったきり、運ばれてくることはない。誰かが様子を見に来ることもない。

たった一つの行灯があるだけの部屋で、一人きり。

だんだんと暗くなる部屋の隅で蹲った娘はやがて静かに涙を流し始めた。

どうしようもなく、寂しかったからである。

ここから出してと言ったところで聞き入れてはもらえない。少しでも反論しようものならもっと痛い目に合う。

どんなに屋敷での生活が苦しいと思っても、元の家に戻ることも出来ない。両親は口減らしのために、兄妹の中で一番幼い娘を養子に出したのだ。つまり捨てたも同然である。

娘は上の兄弟たちがそう話していたのを偶然耳にしており、それ故、新しい生活を心待ちにしていた部分もあった。なのに今、この有様である。

自分はたったひとりなのだ。

その事実が、悔しくて、悲しくて、本当に寂しくてどうしようもなくて。

遂に声を上げて泣いてしまいそうになった時だった。

——泣かないで。

突然そんな声が出て、娘の頭にそっと置かれる手があった。

主人夫婦のものでも、女中たちのものでもないことは直ぐに分かった。彼らはそもそも

こんな時間にここへは来ない。

それに、彼らはこんな風に自分に触れたりしない。

恐る恐る顔を上げると、目の前には黒髪の少年がいた。

暗闇の中でもはっきりと見える白い浴衣を纏った、十を少しばかり越えたくらいの少年。その顔立ちは、幼い娘が一瞬見惚れるほど整っていた。

けれど、娘が何より驚いたのは、少年がむけてくる眼差しが、とてもとても優しくかったことだった。

いつも向けられる、見下すような冷たいものとは違うその眼差しに、気付けば娘は尋ねていた。

——あなたは。だれ？

——わたしは……そうだね、座敷童、というモノだよ。

——ざしき、わらし？

——そう。一言で表すなら妖怪だ。でも安心して。わたしは君に危害を加えたりしない。絶対だ。

そう言って少年は娘の頭を二、三度撫でた。

相手を労わるような手のひらの感触。そのことに、娘は強張っていた身体から力が抜けていくのを感じた。

このひとは、優しいひとだ。

そう思ったからである。

——本当は、こうして妖怪が人間に姿を見せて言葉を交わすことは、禁じられているのだけれど、どうしても我慢出来なくて。

——どうして、それがだめなの？

——……………狙われてしまうから。

呟くように答えた少年の瞳が、一瞬だけ小さく揺れた。

そのまま何も言わずにそっと離れた少年の手を、娘の小さな手が掴む。

——ねえ、またあしたも会いにきて。

——えっでも……

——おねがい。ずっとひとりぼっちなんていやなの。おねがい……

涙に濡れた瞳で、娘は切実に請うた。今掴まなければ、このひとはきっと消えてしまうと思ったからだ。

そして少年も、孤独な娘の願いを突っ張ねるほど冷酷ではなかった。いやむしろ、そこで娘を振り払えるなら、我慢出来ずに姿を見せたりはしなかつたらう。

少年は、底無しに優しくあつたのだから。

——……分かつた。また明日も君に会いに行くよ。

——ほんとう？

——ああ、約束しよう。そうだ、まだ名乗っていなかつたね。わたしは深月、というんだ。君は？

——わ、わたしは……沙良。

そう言つて、沙良は久方振りに笑みを零した。

それからというもの、沙良は深月と一日の終わりに顔を合わせるようになった。

そこが座敷牢の中でも、与えられている小さな部屋でも、二人には関係なかつた。ただ体を寄せ合い、言葉を交わす、それだけで十分だつたからだ。

そしてその頃から、沙良はよく笑うようになった。以前のように怯えながら一日を過ごすのではなく、しっかり背筋を伸ばして、年相応に笑う子供になつた。

夫婦からの理不尽な折檻は尚続いたが、沙良は挫けなかつた。

どんなことがあつても、今は深月がいる。寄り添ってくれる人がいる。そのことが、沙良の心の支えになつていた。

深月もまた、己の行為が危険なことだと自覚しつつも、無条件で頼ってくる沙良をいつしか妹のように思い、可愛がつた。

二人は幸せだつた。

なのに、運命はその幸せすら許さなかつた。

沙良が十二の時、深月の存在が夫婦に知られてしまつたのである。

座敷童というのは、住み着いた家に財や幸福を齎す妖怪であり、夫婦が資産家であつたのもその影響からだつた。

普通なら、家人に己の存在を知らせたりもするが、深月は沙良以外にはしなかつた。

夫婦がとても欲深いことを知つていたからだ。

彼らに見つかれば、どうなるかは想像に難くない。だから深月は慎重に慎重を重ねていた。

だが、毎晩沙良の部屋で話し声がすることに気付いた妻が「座敷童」という言葉に反応し、部屋に押し入つたのである。

深月は取り押さえられ、助けようとした沙良も突き飛ばされて身体を打ち、身動きが取れなくなつた。

程なくして、夫も騒ぎを聞きつけてやつて来た。

——おい、お前、座敷童がいたって？

——ええ。この子と一緒にいる所を捕まえました。

——でかしたぞ。座敷童がいるとなれば、我が家はこの先も安泰だ。

満面の笑みを湛える夫婦に対し、深月は顔を顰めていた。

確かに座敷童という妖怪は住み着いた家に幸福を齎すが、家から出て行ってしまえば他の家と変わりなくなる。

いつまでも同じ家に座敷童はいない。妖怪にだって心はあるのだ。

けれど夫婦は、どこまでも心というものを理解しなかった。

——でも、座敷童はその家から出て行くこともあると聞くぞ。万が一そうなったらどうする？

——ではそうならないよう、牢にでも閉じ込めましょう。妖怪ならば死なないし、我が家は末代まで栄えることができます。

夫婦の目にはもう、深月は「金儲けの道具」としか映っていなかった。

抵抗する深月を連れて夫婦が部屋を出ようとした時だった。

——待って下さい！

起き上がった沙良が、両手を広げて立ち塞がったのだ。

——何の真似だ、そこをどけ！

——い、嫌です。深月を放してくれるまで動きません。

——生意気を言うんじゃないやありません。折角貴女が黙っていたことを水に流してあげようと思っていたのに、また罰を受けたいの？

——……深月は、私の大切な友達なんです。これから酷いことされるって分かってるのに、見捨てるなんて出来ません！

今まで従順に言うことを聞いていた沙良の反抗的な態度は、夫婦、特に夫の逆鱗に触れたらしかった。

夫は額に青筋を立てながら沙良の首に手をかけ、締め上げたのだ。

——沙良っ！

——あ、あなた……

——これまでの恩を忘れたか。親に捨てられたも同然のお前をここまで面倒見てやったのは誰だと思ってる！ お前は大人しく、俺たちの言う事に従ってれば良いんだ！

頭に血が上った男の力に、ろくに体力もない娘の沙良が敵うはずがなかった。それでも、意識が遠のきかける中で沙良は必死に言葉を紡いだ。

——深月は……座敷童は、誰かに、幸せを届けるために、いるんです……………誰かの、幸せのため、にいるわけじゃ……………ないんです……………！

その言葉に激情した夫が更に力を強めた瞬間、部屋に突風が吹き荒れ、軒並み吹き飛ばされた。机も、行灯も、襖も。夫婦もそれぞれ壁に身体を打ちつけて気を失った。ただ一人、首を絞められたことで既に気を失っていた、沙良を除いて。

突風を引き起こした張本人である深月は、ぐったりと倒れている沙良に歩み寄り、そっと抱きかかえた。

十二の娘にしては軽く、細い身体。そしてその細い首筋に刻まれた手の痕に眉を顰めつつも、深月は沙良に顔を寄せ、囁いた。

——ごめんね。わたしを庇ったせいで、君が傷つくことになってしまって。これからわたしは、君がもう傷つかずに済む場所へ君を送ろうと思っている。これが、わたしが出来る「幸せの届け方」だから。……………どうか君の未来に、数多の幸がありますように——

### 三

「——その後、沙良は別の屋敷に貰われていき、その家で幸せな一生を送った。一方深月は、妖怪とは言え怒らせたことで報復を恐れた夫婦によって、社を建てられ祀られるようになった。そしていつしか、産土神と言われるようになったとき」

「ふーん……………」

長いような短いような話に、私はいつの間にか聞き入っていた。

妖怪が祀られて神様になるなんて俄には信じがたいが、どこかであり得そうな気もした。

それは話の年代が昔だからか、話自体が超自然的なものだからか、少年の語り口がそれっぽく感じるからか。

「だけど、別の屋敷に貰われていった沙良っていう子、本当に幸せな一生を送ったの？ 実はそこでもいじめられてた……………なんてことは無い？」

「それは無いよ。本当の娘みたいに可愛がられていたから。そうそう、その沙良が貰われていった家『綾瀬』っていうんだ。君の名字と同じだね、沙也香」

「……………え？」

あまりにも当たり前前のように紡がれた言葉に、私、綾瀬沙也香は思わず少年の方に体を

向けた。

「待って。私、君に名乗った覚えはないんだけど、何で名前知ってるの？」

「さあ、何でかな」

「それに、さっきの質問、即答してた上に「それは無い」って断言してたよね？ それとあの話も、何かこう、妙に主観的だったと言うか、まるで見て来たみたいだったけど、一体誰に聞いたの？」

矢継ぎ早に聞く私に対し、少年はおもむろに体を起こして私と向き合う。その顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

「そのことについては、君の想像に任せるよ、けれどね、ずっと見守って来た彼女の子孫が来てくれたんだ。顔を見て、言葉を交わしたいと思ってしまうのは、誰だって同じだとわたしは思うよ」

「……………まさか、君は」

「じゃあね、沙也香」

その言葉と共に、白い浴衣がゆらりと踊った。艶やかな黒髪が夕闇に沈んだ杜の中に溶けて行く。

その様を、私はただ見送ることしか出来なかった。

遠くから聞こえて来る神楽の音色が一度止み、別の音色に変わる。それを聞きながら、私はゆるりと空を見上げた。

藍色の絨毯の上には、煌めく星々が散らばっていた。

完